

嶋崎尚子・中澤秀雄・島西智輝・清水拓・
張龍龍・笠原良太著

『台湾炭鉱の職場史』

——鉱工が語るもう一つの
台湾』

評者：福本 寛



筑豊の三井田川鉱業所から台湾・基隆炭礦へ赴任した技術者の足跡を求め、2011年頃、評者は初めて台湾を訪問した。初の渡台では、後に田川市石炭・歴史博物館と友好館になる新平溪煤礦博物園區や猴硐煤礦博物園區を見学したが、当地では炭鉱の遺跡が保存され、かつ、活用されていることに驚いた。前者はトロッコ（通称：獨眼小火車／一つ目小僧）による石炭運搬線が坑口から選炭場や駅まで連結し、後者は坑口や選炭場などの施設が現存していて、今でも炭鉱の様子が視覚的に理解できる。このように系統的に保存されている鉱山遺跡は、日本では稀であろう。金属鉱山の老街だった九份には、日本人観光客が多く押し寄せている一方で、新平溪や猴硐は日本ではほぼ知られていなかったことに、残念な思いがした。

日本での台湾研究は、日本台湾学会や台湾史研究会、日本植民地研究会など活発に行われている。しかしながら、台湾の石炭産業を主眼とした研究は、戦前期に限るが、日本側では長廣利崇氏や島西智輝氏、寺島敏治氏らによる経済史の観点からの研究、台湾側では陳慈玉氏による一連の研究があるに留まり、日台を通じてごくわずかであった。台湾でも日本と同様に、か

つてはエネルギー産業の一翼を担った石炭産業だが、その歴史を伝える遺跡や記憶の継承にあたり裏付けとなる学術的な研究が消極的であったことに、台湾側では危機感を覚えていた。著者らの台湾での現地調査に炭鉱経験者らが非常に協力的であったことは、この危機感から生じたものでもあり、ある意味、台湾側の期待（20頁）に応えたのが、本書である。

本書は、産炭地を研究する社会学者を中心に執筆されたため、全般的に1945年以降の中華民國時代の台湾を対象とする。2部構成であり、前半の第1部「煤鉱 Meikuang」の歴史と現場」では、「李顔二家」を通じた台湾石炭産業の歴史的な俯瞰（第1章）と中華民國時代の石炭産業史が概観（第3章）され、瑞三炭鉱の具体的な採炭現場が描き出される（第2章）。後半の第2部「瑞三での鉱工の仕事と暮らし」では、「傑出した領班」だった周朝南氏を中心に、台湾石炭産業の生活史、職場史が叙述され（第4～7章）、現在の活動（第8章）とともに終章で位置づけが考察される。

本編に先立つ序章では、「台湾炭鉱への招待」として現状と課題が述べられる。「爆速文化化」（18頁）の表現は、前述のような炭鉱遺跡等の系統的な保存が日本を含む東アジアでも稀有な例であり、何より猴硐鉱工文史館のような炭鉱経験者の積極的な継承活動に起因する。著者らが拠点とした新平溪煤礦博物園區や猴硐煤礦博物園區は、現在では石炭産業を失っているが、遺跡として保存された炭鉱が視覚的に理解される上に、炭鉱経験者の記憶にアクセスしやすい状況は、今でも坑口から石炭が掘り出されると錯覚するほどである。このように、ハード面とソフト面から喪失した石炭産業を体感できる事例は日本では稀である。台湾では石炭産業は終わったのではなく、実態を変えた「石炭産業」が、これからも継承されていくのであろう。

なお、「爆速文化化」の背景の一つには、日本統治時代の産業遺跡をリノベーションする「文創産業園區計画」（2003年）の影響もある。台湾では、日本統治時代の建造物をリノベーションしてクリエイティブな芸術振興を図るため、華山、台中、嘉義、台南、花蓮の旧酒造工場や煙草専売局を五大文創産業園區として、政府によりモデル事業が実施された。現在もユニークベニユーとしてイベントや展示会などが開催されており、多くの観光客を集めている。「文創産業園區計画」による建造物等の保存や積極的な活用を鑑みると、日本は遅れをとっていると言わざるを得ない（31頁）。政府の「文創産業園區計画」は地方にも影響を与え、「地方文化館事業」「新故郷社区造営事業」（第3章）にて、新平溪煤礦博物園區や猴硐煤礦博物園區の炭鉱遺跡まで拡充したことが、炭鉱の全容がわかる系統的な保護（保存と活用）につながったと考えられる。

さて、台湾の石炭産業について、まず前提となることは、炭層が薄層であり、かつ、褶曲で傾斜の緩急があるという地質条件にある。世界でも有数の薄層であるため、台湾の炭鉱では大規模な機械化が困難であり、日本の炭鉱における中小から零細の規模に留まらざるを得なかったことが、第1章で指摘される。

台湾の薄層は、採炭方法や仕組み、労働環境、技術や保安、炭鉱の規模、ひいては石炭産業史全体を規定したと言っても過言でない。台湾石炭産業を俯瞰する上では、戦前戦後を通じて終始、薄層採炭であったことを念頭におかなければならない。台湾では大規模な炭鉱企業であった「基隆顔家」と「瑞芳李家」でさえも、日本では中小程度であった。なお、戦前の日本統治下において、「基隆顔家」は日本の三井鉱山とともに基隆炭礦を経営し、「瑞芳李家」もとは基隆炭礦の請負から出発している。特に

戦前までの台湾の炭鉱は、日本の影響を強く受けて、薄層に対峙した。

第2章では、戦後の薄層採炭の実態が、瑞三炭鉱の採炭現場を例として描き出される。すべての鉱工（作業員）が直轄である台陽鉱業に対して、瑞三では領班が鉱工を班に束ねて作業を請け負う。さらに、領班は5人（5班）程度が1人の監工の指揮下におかれ、斜坑1本につき2人程度の監工が配置されていた。瑞三も薄層であるため、機械化がコールピックやチェーンコンベヤ程度に留まり、重筋作業が1990年代まで続いた。

採炭の様子は、あたかも日本・筑豊の山本作兵衛炭坑記録画の様子だったと指摘する。しかしながら、細かく言えば、山本作兵衛炭坑記録画の手掘り採炭の様子は残柱式の場面であり、重筋作業による長壁式採炭はほとんど描かれていない。日本、特に筑豊では、残柱式／手掘りから長壁式／機械への移行が一般的なイメージだが、台湾では長壁式／手掘り（半機械）へ分岐しており、移行は一樣ではない。炭鉱の作業形態の変遷は、地質条件に規定されることを改めて理解できる。いずれにせよ、台湾で山本作兵衛炭坑記録画が大きな評価を得ている理由は、寝掘り、座り掘りといった人力で薄層に挑む様子が、台湾の状況に酷似するためである。

第3章では、台湾の石炭産業が2000年代に終息する過程について政策を中心に述べられる。石炭から石油への転換、合理化などの諸政策は、多少時期が前後するが、日本とほぼ同じ過程を歩んでいる。本章で指摘された台湾の石炭産業終息に向けた3つの主要因、すなわち、災害発生率の上昇、生産コストの増大と需要の減少、労働環境の悪化の背景にも、機械化が困難だった薄層が起因している。

2000年に台湾の炭鉱は全て閉山したが、前後して実施された施策である「地方文化館事

業」「新故郷社区造営事業」による補助金から、新平溪煤礦博物園區や猴硐煤礦博物園區のように遺跡となった炭鉱のハード整備を行い、地元では記憶を継承する活動を行ってきた。炭鉱閉山のタイミングが、前述した「文創産業園區計画」とほぼ同時期であったことも、両園區が炭鉱を系統的に保護できた要因の一つであろう。一方で、炭鉱の実態を伝えない、観光・レジャーに重点を置いた展示は、猴硐鉱工文史館設立の動機となった（168頁）。

本書第2部は、瑞三炭鉱で領班だった周朝南氏の生活史、職場史が、幼少期から炭鉱就職時まで（第4章）、領班の仕事（第5章）、炭鉱閉山と現在（第6章）と語られる。周氏の職場史は第3章にリンクするものであり、まさに光復後の台湾石炭産業史を表す集合的記憶であるが、周氏は典型的な炭鉱労働者ではなく、「傑出した鉱工」と位置付けられている。評者も周氏に面会したことが幾度とあるが、炭鉱の経験、記憶を伝えるという強い意志やリーダーシップからも、「傑出した」という評価は妥当である。

周朝南氏は、終戦直前の1944年に猴硐近郊の村で生まれた。当時すでに、親や親族は炭鉱で働いており、自身も16歳から炭鉱で働き、24歳から瑞三と瑞和炭鉱で仕事を掛け持ちしていた（第4章）。28歳で瑞三にて領班となり、保安、事故、救護隊、工会（組合）、福利厚生についても語られている（第5章）。日本の炭鉱作業員は、自身の分野しか経験していない場合が多いが、周氏は幅広く経験、記憶しており、瑞三炭業を多方面から理解することができる。第6章では、1990年の瑞三炭鉱閉山へ向かう過程が語られており、貴重な証言となっている。

台湾石炭産業と日本の石炭産業で、特に異なる点は、女性の坑内労働であり、周方糖氏と林

首氏の経験談が第7章で語られる。日本では、鉱夫労役扶助規則の改正により、1928～33年にかけて女性の坑内労働が原則として禁止された。当時、日本統治下だった台湾でも女性の坑内労働が議論されたが、貴重な労働力を失うとして禁止されるに至らず、台湾で女性が入坑禁止となったのは、中華民国時代の1964年だった。日本では女性の入坑禁止にともなって、昭和期初頭に採炭現場の機械化、技術革新が進んだが、台湾は薄層であったため、機械化困難で人力に頼らざるを得なかった。したがって、女性は貴重な労働力となり続けたため、1964年まで入坑が禁止されなかったと考えられる。日本では見られない女性の坑内労働は、台湾では日常の風景だった。

女性の坑内労働が禁止された1964年以降、日本と同様に、女性は危険が少ない坑外での仕事に従事したが、炭車を押してひっくり返すズリ（九州・山口ではボタ）捨てなどの人力作業を、女性は引き続き行っていた。日本では、ズリ捨ては巻上機運搬であるため、女性の人力運搬は、特に戦後の日本では見られない光景である。

第8章は現在の課題として、猴硐の元鉱工らによる年金獲得運動と記憶継承が述べられる。国民基礎年金制度（2005年）が施行される以前の労働者は対象外であり、かつ、農業・漁業のような加給金が炭鉱労働者にはないため、過酷な労働環境であった炭鉱の労働者にも適用するよう年金獲得運動を展開している。評者も訪台時に、周氏らが熱く語っていたことを記憶している。

彼らが猴硐鉱工文史館を設立した背景には、猴硐の展示館への不満とあわせ、年金獲得運動も動機の一つとなった。猴硐鉱工文史館には、炭鉱の一次資料が保管、展示されているが、もとは周氏らが自分や家族、友達に関わる記念品

として、「ゴミ」の中から拾ってきたものであった。この収集資料は今では貴重となり、本書執筆の基礎資料ともなった。猴硐鉱工文史館は周氏らがボランティアで運営していたことから、自らが従事した炭鉱の記憶を継承するという熱意が伝わってくる。

終章では、周朝南氏らの生活史、職場史を踏まえ、「家族ぐるみの労働・移住・出稼ぎ労働」と「一班一家」「炭鉱での女性労働」「事故・災害と補償」「労働者と会社との関係——自助と誇り」の4項目が考察される。家族ぐるみの労働と出稼ぎ労働は、領班の権限のもとで、班体制での現場作業を成立させた。日本では「一山一家」と企業単位だが、台湾ではより小さな単位で「一班一家」と表現した。また、薄層で危険度が高い台湾では保安より生産が優先され、1984年の三大災害が契機となって合理化が促進されたにもかかわらず、災害や事故は頻発し、2000年に台湾の炭鉱は全て閉山した。周氏が従事した瑞三炭鉱での「共同体艱難」のスローガンは、労働者に忍耐を強いるのみだったという。

台湾石炭産業の職場史は、無力な炭鉱労働者とその家族が「一班一家」の自助精神で協働した「誇り」の軌跡であるが、年金獲得など現在でも解決に至っていない課題がある。本書が一助となることを願ってやまない。

本書の対象と異なるかもしれないが、評者の関心が及ぶ範囲で、最後にコメントを付したい。

第一に、炭鉱遺跡の保護である。序章でも述べられているように、新平溪や猴硐などで一連の炭鉱遺構が保存されていることは、台湾の大きな特徴である。これは、台湾の炭鉱が閉山した直後の2000年代が、「文創産業園区計画」に発する一連の近代化遺産、産業遺産の保護のタイミングと一致したためと考えられる。日本で

も同じ頃、国指定基準の対象時代を近代まで拡大(1995年)、原爆ドームの世界遺産登録(1996年)、文化財登録制度の創設(1996年)と、いわゆる産業遺産、近代化遺産の保護の機運が施策として高まった時期であり、1997年に閉山した三池炭田では、万田坑及び宮原坑が国重文(1998年)、国史跡(2000年)として炭鉱遺跡の保護も図られるようになった。

そもそも台湾では、日本統治時代の建造物、産業遺産の保護については先駆的であり、日本も見習うべき運用方法は多い(東京文化財研究所(2020)『台湾における近代化遺産活用の最前線』)。2012年に台湾で開催されたTICCIH(国際産業遺産保存委員会)にて採択された「台北アジア工業遺産宣言」では、台湾のみならずアジア諸国での産業遺産の保護が勧告されている。本書が扱う炭鉱遺跡でも、日本と台湾との国際交流がより発展していくことを期待している。

第二に、請負形態の問題である。本書の領班は職員(技術者)と作業員をつなぐ中間層であり、日本でも小頭、頭領などと呼ばれた存在である。戦前の日本統治下における台湾でも、類似する制度として苦力頭制度があったとされるが、実態は不明である。

また、本書では、戦前ではあるが、瑞三炭鉱の創業者である李建興が、もとは基隆炭鉱の小包頭(採炭請負人)として登場する(48頁)。(小)包頭は、作業請負のみならず、労働力の募集、提供までも行う。募集と提供を含む点では、日本でいう納屋頭、飯場頭に相当しよう。

周氏の聞き取りから、瑞三炭鉱の領班は、作業員へ指示して作業の管理を行い、請負給の賃金を作業員へ分配する。宿舍や用具は斡旋するが、人員確保は行わないので、部分的な請負といえる。

なお、大陸の撫順炭鉱では、把头が領班に相

当すると考えられるが、先行研究では、作業の指揮監督、福利厚生や日常管理、募集の役割といった大把头／小把头の機能の変遷が検討されている。また、日本の先行研究でも、請負範囲や作業員の直轄／間接雇用などが、残柱式から集団による長壁式採炭への移行と関連して論じられている。

台湾では、直営の薄炭採炭はコスト高となり、かつ、作業員募集も困難であったことから、日本統治時代から請負（斤先掘）が多用されてきた。薄層採炭という条件に対して、請負の構造が戦前戦後を通じてどのように変化していくのかは、再整理が必要であろう。

第三に、瑞三炭鉱と台陽炭業との比較である。本書でも、瑞三は班単位の請負制であるが、反して台陽ではすべての鉱工が直轄だったとされている（60頁）。したがって、台陽では領班が存在したのか、作業管理はどうだったのか興味深い。本書では瑞三が中心だったが、台陽炭業や引き継いだ新平溪炭鉱についても、さらなる研究が望まれる。

第四に、炭鉱従事者の階層差である。本書では傑出した領班だった周朝南氏が中心に据えられていたが、会社側の経営者や技術者の生活史、職場史も描かれることで、台湾石炭産業をより多角的に理解できるものと考えられる。

第五は、日本との比較である。炭鉱は類似した作業環境であるために画一化されやすいが、比較をすれば、各地の炭鉱は部分的に異なることがわかる。この違いこそが各産炭地の特徴であり、他地域と比較することで、より鮮明となる。例えば、本書序章にて東アジア、日本と台湾との関係を紹介したように、今後は日本の炭鉱と比較することで、薄層に規定された台湾石炭産業がよりいっそう特徴づけられると考えられる。

評者としては、戦前の日本統治時代における

炭鉱の技術等が、戦後の中華民国時代へどのように連続し、断絶したかに関心がある。瑞三炭業の名称由来となった瑞芳三坑（猴硐）では、戦後は下層域を広範囲に採掘したため、日本統治時代よりも出炭量が増加した。一方、中華民国時代でも「落盤」「監督さん」など日本語の一部が引き継がれて使用されており（30頁）、日本統治時代の影響は、戦後にも見られる。

さらに、敗戦にともなう引揚げの過程で、留用技術者らによる引き継ぎの問題があるが、石炭産業の分野では不明瞭である。戦前の基隆炭礦に従事した方の記憶によると、光復後の国共内戦で渡台した外省人は石炭採掘の経験がなかったため、戦前に日本人から研修等を受けた本省人が技術者の実務を担っていたという。

台湾は日本と異言語である上に、炭鉱は専門用語が多用されるため、言葉の壁は高いものと感じられる。しかしながら、これまで日本の産炭地研究で蓄積がある著者らは、暗闇の地下で作業するという環境を台湾でも共有できるため、通訳を介したとはいえ、理解はスムーズであったと本書で言う（102-103頁）。

評者が台湾で出会った郭葉輝氏は、台湾政府経済部の元鉱山技師で戦前生まれだったため、日本語が堪能であった。台湾の炭鉱について多くのご教示を得たが、その言葉の一つ「炭坑マンに国境はない。みんな心が溶け合う」は、今でも忘れられない。著者ら炭鉱の研究者も同様に言語は必ずしも障壁にならず、今後の研究の深化に期待したい。

（嶋崎尚子・中澤秀雄・島西智輝・清水拓・張龍龍・笠原良太著『台湾炭鉱の職場史——鉱工が語るもう一つの台湾』青弓社、2024年8月、219頁、定価：本体3,000円＋税）

（ふくもと・ひろし 田川市石炭・歴史博物館学芸員）